22　次の文章は、黒井千次の小説「声の山」の一部である。「僕」は父に連れられて、今まで登ったことのない山に登る。以下はその時のことを書いたものである。これを読んで後の問いに答えよ。　　　　〈大阪大〉二〇二二年度出題

　「お前、なにか失くして困っているものはないか？」

　半コートを脱いで再び歩きはじめた父親の放った言葉が五郎を剌した。口ごもったまま答えることが出来ずに息子は足を運んだ。

 ⑴左の手首が頼りなく軽かった。知っているのだろうか、と彼は父の表情をうかがった。

　「別に……。」

　今日の自分の装備で一つだけ気がかりなのは時計のないことだった。三年生になった時にようやく買ってもらったブルーのベルトのついた腕時計は今も目のすぐ裏にあるのに、一週間前から姿を消していた。机のひき出しはもちろん、本棚、押入れ、バッグをさがし、遊びに行った友達の家まできいたのだが遂に行方がわからない。――俺は中学校にはいった際にはじめて兄貴の古い時計をもらったのだ、小学生から時計を持つ必要がどこにある、と父親は五郎の要求をなかなかきき入れようとはしなかった。遊びに出かけて帰る時間を守るのに腕時計があった方がいい、とようやく母が認めたのは、家に来た友達が三人とも腕時計をはめているのを見たからだ。買ってもらった時計そのものへの愛着というより、それを失くしたことによって叱られるのが怖くていやだった。

　「なにか思い出すものはないか？」

　父親がどこかでみつけてそのまま黙って持っているのだろうか。二人だけのこういう場所で紛失を告げてしまった方が結局叱られ方が軽く済むかもしれぬ。曖昧に開きかけた五郎の口を父の次の言葉が遮った。

　「品物ではなくて、生き物でもいいんだよ。」

　五郎の予想に反して話は意外な方向に進んでいきそうな気配だった。

　「生き物？」

　「小鳥だとか、虫だとかもさ。」

　「死んだのはいるけれどね。ほら、白いが巣の中でさ。」

　「死んだのは駄目だ。それはもう戻らない。」

　「逃げたようなもの？」

　うん、と父は短く答えた。父の言ったとおり短い下りはすぐ終ってまた登りがはじまっている。最初にきかれた時、腕時計のことを思い切って言ってしまった方が良かったのかもしれないという後悔が五郎の中に薄く湧きはじめる。

　「権現さまにお神酒をあげてお祈りしてから鍵取八郎右衛門という人に頼むと、家出して行方が知れなくなった者や、突然消えてしまった肉親をさがし出してくれたんだ。」

　「どうやって？」

　「と太鼓をきながら神社のまわりをぐるっとる。廻りながらさがしたい人や物の名前を三度呼ぶ。なんとかを出してたもれえーっていうふうにな。」

　「そうすれば出て来る？」

　「いや、呼び声になにかの反応があった時には必ず消息がどこかから知らされて、いなくなった人に会えたというよ。それでこの権現さまは有名になったんだ。」

　「反応というのは、山彦とか？」

　「そうだろう。」

　「風とか？」

　「うん。」

　（中略）

　「呼んでみようか？」

　「…………。」

　「ねえ、呼んでもいい？」

　「……なにを呼ぶんだ？」

　「ただ、叫んでみるだけだよ。」

　「……やってみろ。」

　あー、と五郎は遠慮勝ちの声をあげた。竹のこもった空気の中に声はすぐ消えた。

　「そんな叫び方じゃ駄目だ。」

　きいた時は気の進まなそうな返事しかしなかったのに、今度はけしかけるような父の言い方だった。おー、と五郎は声量をあげた。前より更に反応はなかった。おーいになろうが、ヤッホーに変ろうが、山の空気はただ五郎の声をんだままだった。馬鹿にされたような気がした。なにかいけないことをしたような気がした。⑵急に自分がいやになって五郎は唇をんだ。

　一番下の石垣を背にして枯草に腰をおろし、電車を降りた折に駅で買って来た弁当を開くと気持ちが和んではじめてピクニックの雰囲気になった。北を石垣に守られ、冬の日をいっぱいに浴びた南面のその場所は絶好の休息地だった。変電所とは反対側になるだがそちらの側でもなにか工事が行なわれているのか、時折下の方から金属性の重い音が登って来る。足下の崖のあたりから黒い鳥がふわりと浮いて空を舞いはじめる。とんびかな、と五郎が目を細めて後を追うと、カア、カア、という鳴き声がのどかに返って来る。

　昼食がすみ、水筒のじ茶をたっぷり飲み、バッグから出したせんべいをりながら五郎は枯草に寝転んだ。

　「いいとこだね、ここは。」

　思わず声がから出た。ジャンパーを脱いでスエターになった身体にほんの少し冷たく感じる空気が快い。

　「人によってはな、こんなことを言ったらしいよ。自分から姿をくらまして出て行った者がしばらくしてどうしても帰りたくなったりするだろう。黙って帰って来るのは具合が悪いから、あの山で名を呼ばれたので止むを得ず帰って来たんだということにもしたんだろうって。」

　五郎は目の上に指を組んだ手をのせたままで、へえ、と息を吐いた。昼寝でも出来そうなのんびりとした枯草の日りのことを言ったのに、父親の言葉が別の方にそれて行くのがおかしかった。弟や妹が一緒だったらここでの時間の過し方も違ったろう、と五郎は思った。けれども今は、枯草の上を転げまわったり、拾った枝で斬り合いをしたりするより、大人のようにただ横たわっていたかった。

　「もう一度見てくるからな。」

　父が立上って身体から枯草を払い落した。

　「お宮を？　あの道？」

　寝たままで五郎はたずねた。聞き取りにくい声を返して父は階段の方に歩きはじめている。

　「ここに帰って来てよ。まさかいなくなったりしないだろうな。」

　急になにかが立去って行くような気がして五郎は片肘つくと身を起した。

　「ばかだな、ここはいなくなった人を探す場所じゃないか、逆だろう。」

　愉快そうな笑い声を残して父の姿は石垣の向うにすぐ消えた。ナイフを出して枝を削ろうか、それとも「ぼうけん手帳」を読んでみようか、と物憂く考えながら五郎はまた頭を草につけて目の上に指を組む。烏の鳴き声が横の方からきこえて来る……。

　どのくらい時間がたったのかはっきりしない。まだ父は戻って来ない。五郎は草の上に起き上った。太陽の位置が少し右に動いたように思われる。日の色が微かに薄くなっている。小さな不安が自分の奥に生れているのに五郎は気づく。それはまだはっきりした形をとってはいない。冷蔵庫に似た白い扉を開く父親の姿が見える。雪の残った狭い道を石垣に背を擦りつけるようにして横いに進む無精の生えた父の顔が見える。ひやりとした竹藪に足を踏み込む影が見える。烏だろうか。⑶弱い獣のようにぴんと立てた五郎の耳に短い響きがきこえた。もしかしたらパパはなにかを失くしたのかもしれない、という考えが突然ひらめいて五郎をんだ。失くしたとすれば、それは馬みたいに大きなものに違いないと彼はに思った。向うに歩き続ける父の身体から直角に離れて遠ざかって行く白い馬をいつか見たような気がする。竹藪の中の細い道から、たった一声、その馬を出してたもれえ、と今父が叫んだのではないか。五郎は動けなかった。いや、今にも立って走り出そうとする自分を彼は必死におさえつけた。枯草に坐って、どこかから戻って来る父をここで待つことが必要なのだ、と彼は誰に教えられもせずに悟っていた。⑷その父は今の父とはなにかが少し違うかもしれない、そんな予感が息をつめて坐り続ける五郎の中に生れ、彼の体を下の方から静かに浸しはじめていた。

（黒井千次「声の山」による）

問１　傍線部⑴について、「左の手首が頼りなく軽かった」のはなぜだと思われるか、その理由を説明せよ。

問２　傍線部⑵について、五郎が「急に自分がいやにな」ったのはなぜだと思われるか、その理由を説明せよ。

問３　傍線部⑶において、「弱い獣のようにぴんと立てた」という表現にはどのような効果があるのか、説明せよ。

◎ 問４　傍線部⑷について、なぜ五郎は「その父は今迄の父とはなにかが少し違うかもしれない」と思ったのか、その理由を説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　五郎は、Ａ小学生には必要ないと反対する父を押し切って買ってもらった腕時計を一週間前から紛失していて、Ｂ今日の登山にも着けられなかったことをＣ父に気づかれて叱られるのではないかと危惧し、Ｄ時計の不在が強く意識され、本来はめているはずの左の手首が気がかりで仕方ないから。

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔腕時計にまつわるエピソードを本文に即して整理。〕

Ｂ＝２〔腕時計が登山の装備品として本来は必要なことを説明。〕

Ｃ＝３〔腕時計をなくしたことを父に叱られるのを恐れる心情を説明。〕

Ｄ＝３〔「頼りなく軽かった」という身体的感覚を説明。〕

問２　この山でＡなくした物や人の名前を呼ぶと、所在を教えてくれるという伝説を聞いて、Ｂ物の名前を伏せたまま大声で叫んでみたが全く何も起こらないので、Ｃ自分の行いがみっともない上に、Ｄ神聖な山の雰囲気を汚した気がして嫌悪感を抱いたから。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔山の権現さまにまつわる伝説を本文に即して説明。〕

Ｂ＝２〔五郎の呼び声に反応がなかったことを本文に即して説明。〕

Ｃ＝３〔「馬鹿にされたような気がした」という五郎の心情を推察。〕

Ｄ＝３〔「いけないことをしたような気がした」という心情を推察。〕

問３　Ａ小動物が聴覚を駆使して敵を警戒する動作にたとえて、Ｂ父がいなくなり山でひとり取り残され不安になり、Ｃ心細さから父の姿を心の奥で想像しているが、かえってＤ周囲に対してより敏感になっている様子を印象づける効果。

ＡとＢ・Ｃ・Ｄいずれかとの対比がなければ全体０。

Ａ＝４〔「弱い獣」が「耳」を「ぴんと立て」る習性の意味を説明。〕

Ｂ＝２〔父が戻ってこない状況での五郎の「小さな不安」について説明。〕

Ｃ＝２〔「小さな不安」から父の姿を空想で探す五郎の様子を説明。〕

Ｄ＝２〔「不安」から周囲をうかがい過敏になる五郎の様子を説明。〕

問４　Ａ失ったものを呼び戻すという山で父に置き去りにされた不安の中で、Ｂ父が何か大きなものを失ってなんとかそれを呼び戻そうとしていると感じて、Ｃ大人としての父の秘密に触れてしまった気がして、Ｄ今までのように絶対的な存在として父に無邪気に甘えることはできなくなったから。

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔五郎の心情変化の背景となる状況を本文に即して説明。〕

Ｂ＝２〔「その父」とはどのような父のことか本文に即して説明。〕

Ｃ＝３〔「その父」に対して五郎が抱く感情を推察して説明。〕

Ｄ＝３〔「今迄の父」の姿を踏まえて五郎との関係の変化を説明。〕